

国立国語研究所学術情報リポジトリ

平成14年度日本語教育上級研修

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/1915

平成14年度日本語教育上級研修

1. 目的

「日本語教育上級研修」は、広く日本語教育に関する職務に携わっている現職者を対象として、「多様化」に現実的に対応し得る人材の養成を目指し、平成13年度より新たにスタートしたプログラムである。

具体的には、様々な立場の現職者が集まり、各自の現場で見出した問題を出発点として、その現状を分析的に把握し、問題意識を深め、各自が課題として取り組むことを通して、日本語教育改善のための視点・専門的知識・能力を身につけることを目的とする。

さらに、研修参加者は、参加者同士の共同作業や相互交渉を通じて、自らの日本語教育を様々な視点から捉え直し、各分野における協働体制の構築と、分野を超えたネットワークが広げられる人材となることを目指す。

2. 期間

平成14年5月7日～平成15年3月7日

3. テーマ

「教育内容の改善・教育環境の整備のための方法」

上記のテーマのもと、各々が日本語教育現場における実践・研究等から見出した具体的課題を追求する。

4. 募集対象

(1) チーム応募

原則として2～5人の研修チームを構成して、上記3.のテーマに関連する課題を設定し、応募する。

(2) 個人応募

上記3.のテーマを追求するために14年度は「授業の観察と分析」を課題とする。個々に重点的に追求する分野・側面等を副題として設定し、個人で応募する。個人単位の応募であるが、「授業の観察と分析」を共通課題として、個人参加者によるグループとして研修活動を行う。

5. 研修概要

<研修の基本方針>

(1)本研修では、以下の2つを柱として活動を行う。

①相互交渉・共同作業をとおして、自らの課題を追求する。

②他者との連携のために、情報の収集・発信・共有等の方法を模索し、実践する。

(2)本研修は、チーム応募、個人応募に関わらず、個人を研修生として受け入れるものとする。

(3)研修生は、国立国語研究所内外の人的および物的なリソースやネットワークを積極的に研修活動に活用する。研修活動が円滑に進むよう、研修担当者は活動の内容や方法に関する助言、リソースの提供等必要な支援を行う。

<研修活動の内容>

(1)研修生は国立国語研究所の研修担当者との間で、原則として毎月1回、定例会合を持つ。会合は原則として国立国語研究所で行う。チーム参加の場合、具体的な日時を研修チームと研修担当者との調整によって決定する。個人参加者のグループの場合、定例会合は原則として第2土曜日に実施する。定例会合では、それぞれが進めてきた文献研究、情報収集、計画案の作成、データ収集、実践的検討等の結果報告を受けて、次の活動の進め方について研修担当者と共に検討する。なお、研修スタッフは必要に応じて研究会を土曜日に開催する。

(2)研修生は、チームごとに、あるいは共同で、以下のような会を企画・実施する。

①課題に関する自主研究会等（研修の進行にあわせて随時実施）

②中間発表会（公開）

③修了報告会（公開）

(3)研修生は、以下のものを作成し、提出する。

①定例レポート：研修活動の進行にあわせて定期的（月1回程度）に作成し、活動の進捗状況等についての内省・共有・検討のために利用する。

②修了レポート：研修成果をまとめる。

③ダイアリー：研修の活動を通じ、「学んだこと・考えたこと・感じたこと」をダイアリーにまとめる。個人別に自由に記述し、定期的に提出する。定期的な記録・読み返し・分析により、問題点の発見・改善に役立てる。

6. 全体の経過

5月7日：オリエンテーション

特別講義「21世紀に期待される日本語教師像」
西原鈴子氏（東京女子大学）

*定例会合・メーリングリスト等の開始

8月31日～9月1日：中間発表会

2月17日：修了レポート提出期限

3月1日～9日：修了面接

3月28日：修了生修了通知（3チーム11名・個人7名）

4月19日：修了式・修了発表会

(1)レクチャーシリーズ

5月18日

第1回：「なぜ授業観察・授業分析か？」

金田智子氏（国立国語研究所）

第2回：「教師の資質と自己成長の方法」

横溝紳一郎氏（広島大学）

6月8日

第3回：「なぜ授業観察・授業分析か？PartⅡ」

文野峯子氏（人間環境大学）

7月13日

第4回：「リテラシーって何？書くことの社会的文化的ひろがり」茂呂雄二氏（筑波大学）・當眞千賀子氏（国立国語研究所）

(2)基礎文献講読（6月8日～8月10日）

①リチャーズ&ロックハート(2000)『英語教育のアクション・リサーチ』研究社出版

②迫田久美子(2002)『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク

7. 修了レポート

<チーム参加>

(1)「やる気チーム」野口智充・植村健司・三浦佳絵・山口閑子（JET日本語学校）

題目：「日本語教育における学習者の自律を促す方策」

(2)「ドリアンチーム」吉本恵子・深澤道子・河北祐子（KAI日本語スクール）

題目：「教師と学習者の協働によるスピーチとディスカッションの授業—活性化を目指した授業のプログラム化と教師のスキルの意識化—」

(3)「子ども×書くことチーム」渡部和代・末岡佐登美（江戸川区立葛西小学校）、堀美子・出井若菜（江戸川区立一之江小学校）

題目：『「子ども×書くこと」を学ぶ活動の工夫—東京都江戸川区立小学校における日本語学級の実践—」

<個人参加>

(4)木村晴美（広尾ジャパニーズセンター）

題目：「未習の漢字の意味や読み方を類推できる力を養うことを目指した授業改善」

(5)入山修（北区立西ヶ原小学校）

題目：「表面的には日本語が流暢になったけれども、授業の中で困難を抱える子ども達が意欲的に取り組める教材作り」

(6)和田礼子（鹿児島大学留学生センター）

題目：「イメージ図を使った助詞指導の試み」

(7)平木宏育（言語文化研究所附属東京日本語学校）

題目：「教師が問題があると自覚していない授業の授業分析—誤用と誤用訂正を中心とした文字化資料から—」

(8)青柳妙子（ヤマガタヤポニカ）

題目：「授業観察が新人日本語教師の視点に与える影響—授業観察記録の記述から—」

(9)清水明子（語学文化協会）

題目：「初級ビジネスマンクラスにおける授業観察—学習者と教師の質の高いかかわりあいを目指して—」

(10)倉本文子（KAI日本語スクール）

題目：「初級後半期からの自己表現授業—授業観察と分析」

（記：小河原）